様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：１５５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０３１３３

研究課題名（和文）王莽の「新」帝国を創建する標準化改革についての出土文物・文字による研究

研究課題名（英文）A Study on Wang Mang's Standardized Reforms to Create a "New" Empire Using Excavated Articles and Characters

研究代表者
馬　彪（MA, Biao）

山口大学・大学院東アジア研究科・教授

研究者番号：２０３４６５３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：歴代史学者は「新」帝国（9-23）皇帝である王莽が前漢帝国の弊害を改革する「王莽改制」の失敗を理由として否定的な評価をしてきたが、本研究者は三年間を経て出土資料の調査を行った上に、統合検証を通じて1王莽の改革した背景とは前漢後期に行った「是古非今を好む」改革にあった。2都長安の大改造は王莽改制のスタートだ。3王莽が即位空間は彼が「禅譲」政権の特質を表した。4彼の度量衡制の改革はのちの歴代中国王朝の度量衡制に標準化したモデルだ。5彼の空名化封国制の創立は後の時代の先駆者となった。6王莽の改革は表に失敗だといえるが、実は彼の改革は大分後漢の建国皇帝の劉秀に継続されたと判明できたという結論を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来の王莽改革に関する研究には、政治・経済・文化・外交の専門分野における事例研究にとどまっている。これと異なり、本研究構想は、第一に王莽が前代帝国の制度的な破綻に対して制度的な「標準化」しようという斬新な視点としてなされた改革であるということ、第二に現代的研究分野と違い、都・封建国・祭祀施設・華夷階級などの改造項目を構築したこと、つまり王莽が古典の国家理想像に真似て制度改革してみた傾向を検証しようとしたものであること、第三に単なる古典文献でなく出土した文物を融合させており多面的な調査研究・検証が可能であることを特徴とした。このように、実学的な検証によって従来の研究に貢献をした意義がある。

研究成果の概要（英文）：Successive historians have given negative evaluations to Wang Mang, the Emperor of the "New" Empire (9-23), for the failure of the "Wang Mang Reform" to reform the evils of the former Han Empire, but this researcher has been After examining the excavated materials and conducting the integration verification, (1)Wang Mang's reform was based on the reform that he performed in the latter half of the Han Dynasty. (2) Great remodeling of Metropolitan Chang'an is the start of Wang Mang reform. (3) Wang Mang's enthronement space He expressed the characteristics of the "Zen Jo" administration. (4)His metrology reform was a model that was standardized to the later Chinese dynasties. (5)The establishment of his "Kana" fame was a pioneer in later times. It can be said that Wang Mang's reform was unsuccessful, but in fact he concluded that his reform was found to have been continued by Liu Xiu, the founding emperor of Oita After Han.

研究分野：東洋史

キーワード：王莽　新帝国　改革　標準化

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景
(1) 秦と前漢帝国を繋ぐ帝国である「新」を建国した皇帝である王莽は、前漢帝国の弊害を改革する「王莽改制」という新しい政治を行ったことがある。その改革は中国史上かつてない壮挙といえるが、中国の正史『漢書』から従来の伝統的研究においては王莽を「漢の政権を簒奪」した者であるという理由で「王莽改制」に対して否定的な評価が行われてきた。しかし近年出土した文物と文字資料は、王莽の改制の意義が帝国運営における基盤制度の「標準化」(普遍的基準の確定)にあったことを示しており、改めて再研究がしたくなった。

(2) 近年、代表者は仏国国家科研センターのK.Chemla 教授と、出土資料に基づく王莽の度量衡制度についての共同研究をしてきたが、研究の中で、秦・前漢時代には量制と衡制の単位「石」が極めて混乱しており、その混乱を解消したのが王莽による量制の標準化であったことを明らかにした。ゆえに、「王莽改制」全体は中国史において標準化改革であろうかを評価し位置付ける必要性が出てきた。

２．研究の目的
(1) 本研究は、王莽の政策が儒教理念に基づいた普遍的制度の創造を通じて理想的な国家運営のシステムを創造する点にあったことを明らかにし、その政策が後世に与えた影響を正当に評価するために、出土資料と文献史料を統合し論証しようとするものであり、特に前漢以来の帝国制度の「標準化」に着目し、王莽による普遍的システム構築の政策について検証を行う。

(2) 代表はこれまで古代中国都市史研究成果を土台として、「標準化」という概念を活用して、王莽の新たな都城制を解明する目的がある一方で、王莽はどのように中国を初めて統一した秦始皇帝と並び中国の社会統合の基礎を構築したかったかを明らかにする。

３．研究の方法
(1)「新」帝国は短命の王朝だったが制度改革によって貨幣・印鑑等の出土品には鮮明な時代的特徴がある。本研究では王莽の「標準化」改制の研究に関連する新帝国の出土資料を網羅するため、新莽期の墓葬或は城址所在地の文物管理関係の協力者を通じて調査可能な研究所と博物館を抽出して、帝国内地における器物・城址等の調査を行い、北方辺地および南方辺境の順で調査を行うようになった。

(2) 以上のように資料を収集しながら出土資料と文献史料を統合し「首都規画と外交制度標準化」「度量衡標準化」「中央と地方行政標準化」という三課題に分けて検討する。研究が計画通りに進まない場合があれば、速やかに協力者等と相談を行い、代替できる調査地の検討や、スケジュールの調整などによって対応した。

４．研究成果
(1) 王莽の標準化改革した背景とは、前漢後期における漢帝国の制度的な破綻とそれについての「是古非今を好む」という改革意識の高揚である。その「是古」はのちに王莽「復古」改革の原動力であった。国号「新」の帝国皇帝は「復古」という目指した改革は、一見矛盾しているが、実はその時代に「是今非古を好む」改革の集大成だったといえ、「非今」ために「是古」するのは、「是古」は手段で「表」であり、「非今」は目的で「裏」であり、互いに表・裏関係となることがわかったと指摘した。その時代的な改革には儒家の理想が現実とのギャップによっての失敗もあったが、儒家思想全体として帝国創始以来の弊害を改革し、しかもその改革路線は新莽帝国、そして後漢帝国時代にも継続しつつ、最終的に秦の始皇帝が創始した帝国が400年以上にわたっていた強大な「秦漢帝国」として、世界古代史にも誇られることであると評価した。(「漢元帝以降前漢の「是古非今を好む」改革について―新莽復古改革の由来も含めて―」)。

(2) 前漢時代の都は政治と祭祀中心の同心円構造となり、「祖統」と王「統」が両立できない構造的な矛盾が存在していた。したがって「遷都」論を提出したが、ついに漢の平帝期になると、王莽が都の改造を開始した。王莽の都改造とは区画・増築・改築・改名・両都制などの５項目、１５件の措置があるが、その改造は同時進行した措置でなく、平帝時代の前期・新（莽）帝国時代前半の中期・後半の後期というプロセスがあり、「郊兆」の「改作」から「遷都」の「改作」へ、更に「寝廟」の「改作」へ移行した三段階の特徴がそれぞれあると判明した。「東都」洛陽は政治的な首都と「西都」常安は祭祀的な副都と同時に造っていた最中、新（莽）帝国が倒れた。未完成の王莽の都改造でも、その構造的な両都制の設計や「郊兆」「寝廟」の「改作」などの歴史上の位置とその意義は無視できないだろうと考えられる。(「王莽の長安都改造について」)

(3) 王莽が即位と建国式典の政治空間と建国宣言の復元をした研究で、王莽は「禅譲」政権の成立と建国宣言の具体像を明らかにした。本研究は古典において王莽が「新」帝国を成立させた史蹟に関して記載がある乖離をクリアしたいため、主に新（莽）皇帝における改元の時間、即位の空間および建国宣言の内容等にある不明点をめぐって論考するものである。一連の細かい考証

をしたうえで、いくつかの結論に結びつけた。それは「以十二月為正」①の始建国元年の開始及び終了の日付は、一般に知られる紀元 9 年 1 月 1 日～12 月 31 日ではなく、正しいのは紀元 9 年 1 月 15 日～10 年 1 月 4 日であることと、王莽の即位空間は高廟にあたり、未央宮は彼が建国する礼儀空間にあたることもわかったことと、彼が未央宮ではなく「高廟」を選んだら倒れた王朝の初代目皇帝の威霊から政権を「禅譲」してもらおうという主観的な狙いがあったことと、王莽の建国宣言の復元を試みた。そして旧皇室の配置・閣僚の任命・中央官僚の人事・封国制の改革・黄帝の祭祀システムの建成・新貨幣政策等の六つの内容が記録された重要な史料を発見したことを明らかにした。(「試論新（莽）皇帝之改元、即位與建國宣言」)

(4) 王莽の度量衡制についての改革はのち約２千年の歴代中国王朝の国計民生に標準化したモデルを作ったという結論になった。論考は当方とフランス国家科学研究センターの著名学者 Karine Chemla 氏との共同研究の成果である。その主旨は「石」とは秦及び前漢の穀物管理の中には、よく使われる容量単位や量器であったが、王莽以降になるとほぼ「斛」に代わられてた現象についての原因・過程・意義などを明らかにした。具体的な結論は以下の通りである。「石」とは秦及び前漢の穀物管理の中には、よく使われる容量単位や量器であったが、王莽以降になるとほぼ「斛」に代わった。それから秦帝国以来の量衡制はついに標準化された。「石」は最高の容量単位として、当時は国家規定の最高容量単位の「桶」と兼用されていた。王莽の改革する前には、容量の「石」という単位は 10 斗の米や重さの 1 石（秬）の禾の価値と相等する規律があり、故に 10 斗の米はまた 1 石の「標準米」とよばれる。「標準米」は容量単位を定義するときや穀物管理システムを築造するときに重要な役割を果たした。「大小石」とは北方の辺境地域における官粮の供給制度の中には穀物をはかる特殊な単位と量器であった。秦・前漢の時代にはすでに一種の重量と容量いずれも指してない絶対的価値単位の「石」が存在した。「標準米」の価値単位しか其の容量単位の数値と相合わなく、其の他の状態な穀物の価値単位の「石」は各種のサイズの量器によって測量するか、それぞれの容量の数値によって表示するかのこととなっていた。「石」(「秬」ともいう）は本来なら「禾」の重さをはかる単位であり、zjyak（のちに shi となる）と読んだが、その価値は「米」の容量単位の「担」に相等するために、容量の「担」は亦た「石」とも呼び、tam（今日 dan とよむ）と読んだのである。(「秦・西漢容量「石」諸問題研究」)

(5) 旧封建制を破壊しながら新封建制を作ったのは王莽の封国制改革の結果であり、かれが「空名」封国制の創立は後の時代の先駆者となったと主張した。その論の旨をまとめていうと、封国制は前漢帝国（前 206～8）に創造された地方領土経営の最重要政策であるが、統一帝国の中央集権体制の課題でもあった。封国制の地方経営役を活かしつつも中央政権に邪魔にならないようにするということが、前漢政権を交代した「新（莽)」帝国の皇帝王莽が直面する難問となった。本論では王莽がどのように前漢末期に存在していた旧宗室・外戚・官僚などの三つの封国とぶつかり、どのように旧宗室封国を「絶」して新宗室封国を弱体化し、外戚封国を滅ぼし、官僚封国を利用したのかについてその経緯を明らかにした上で、どのように前漢時代における「空名」封国の特例を真似て封国制の一部を架空する恒例として「空名」化制度改革を試したかという特徴を解明する。また、この改革は途中で帝国の滅亡とともに失敗したが、後の時代の価値あるお手本となったことにも言及した、とある。(「王莽における封国制改革の研究」)

(6) 王莽の改革は簡単に失敗だという従来の観点と違い、代表者は彼の改革は大分後漢の建国皇帝の劉秀に「因りて改めず」られて、それは「後漢承新莽制」という史的な現象を発見した。その論には「後漢承新莽制」という史実を第一類の王莽改制中成功したもの、第二類の王莽改制中発案したが完成しなかったもの、第三類の王莽改制中失敗したものに三分類した上で、いわゆる劉秀の「因而不改」とは、実は第一類のものにほぼ全般的に「因而不改」、第二類のものの発想に「因而不改」、第三類のものに部分的に「因而不改」という三つの特徴があると指摘した。(「光武の新莽に「因りて改めず」についての研究」)

要するに、本研究によって「王莽改制」の特徴は先行研究の結果と異なる点を発見した。それは「新」帝国における都・封建国・祭祀施設・華夷階級などのあらゆる面の制度を「標準化」したこと及びその後世へ与えた影響を明らかにした。

＜引用文献＞

①陳垣（援庵）『二十史朔閏表』古籍出版社（北京 1956）p22.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 馬彪	４．巻 70
２．論文標題 王莽における封国制改革の研究― その「空名」化改革の由来と特徴をめぐる―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 山口大学文学会志	６．最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 馬彪	４．巻 14
２．論文標題 試論新（莽）皇帝之改元、即位與建國宣言	５．発行年 2020年
３．雑誌名 異文化研究	６．最初と最後の頁 15-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 馬彪	４．巻 14
２．論文標題 王莽の長安都改造について	５．発行年 2019年
３．雑誌名 河合文化教育研究所『研究論集』	６．最初と最後の頁 103-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 馬彪・林力娜（Karine Chemla）	４．巻 4
２．論文標題 秦・西漢容量「石」諸問題研究	５．発行年 2018年
３．雑誌名 中国史研究	６．最初と最後の頁 41-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 馬彪	4．巻 12
2．論文標題 漢元帝以降前漢の「是古非今を好む」改革について―新莽復古改革の由来も含めて―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 異文化研究	6．最初と最後の頁 26-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 馬彪	4．巻 68
2．論文標題 光武の新莽に「因りて改めず」についての研究―「漢承秦制」と同じく「後漢承新莽制」も存在する説の提出―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 山口大学文学会志	6．最初と最後の頁 1-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　3件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 馬彪
2．発表標題 對戰國秦漢都城的文獻探討
3．学会等名 韓國仁濟大學校 加耶文化研究所 第24回加耶史国際学術会議（国際学会）
4．発表年 2018年

1．発表者名 馬彪
2．発表標題 傳統箸文化平衡主義意識
3．学会等名 江蘇師範大學外国語学院（招待講演）
4．発表年 2018年

１．発表者名 馬彪
２．発表標題 中国における湖南研究の動向
３．学会等名 湖南研究（京都）
４．発表年 2019年

１．発表者名 馬彪
２．発表標題 社会史研究方法縦横談
３．学会等名 寧夏大学「蘭山講壇」第16場（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 馬彪
２．発表標題 中国古代「規矩」「方圓」与「標準化」
３．学会等名 寧夏師範大学政治与歴史学院（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計4件

１．著者名 馬彪・林元茂	４．発行年 2018年
２．出版社 中華書局	５．総ページ数 365
３．書名 互古漆香一欣賞傳世漆藝 品味傳統文化	

１．著者名 馬彪・朴淳発・仁藤敦史・高田貫太	４．発行年 2018年
２．出版社 周留城出版社	５．総ページ数 531
３．書名 Gimhae Bonghwangdong site Ancient East Asia-伽耶王城を探求-	

１．著者名 馬彪	４．発行年 2017年
２．出版社 上海古籍出版社	５．総ページ数 455
３．書名 『中国史学史』	

１．著者名 馬彪，張偉国等	４．発行年 2019年
２．出版社 華夏出版社	５．総ページ数 361
３．書名 經典之門（歴史地理篇）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考